

選考委員 激賞!!

パラノイアックな人物の視点を描ききる勇氣と高度な文章技術。

新人離れした作品。

小川哲

誰が存在したかも、語り手の性別すらも明示されないあいまいさ。

たしかなことが

何ひとつないからこそ、

この小説は強い。

角田光代

尋常の景色、おそらくは平穏で退屈な

田舎の景色をそのまま描いて

異常の景色となす不思議な筆力。

美事だった。

町田康

特別な文体と出会う喜びを覚え、言葉自体に強烈に惹きつけられた。

この作品が宿している

ものの大きさに、

ただただ圧倒された。

村田沙耶香

第61回

文藝賞 受賞作!

10年ぶりに故郷を訪れた「わたし」。死んだはずの幼馴染の声が——。

圧倒的異才

待川匙

光のそこここで白くねむる